揺れる耳飾り

井上　靖

講談社

揺れる耳飾り
昭和三十三年十二月二十五日第一刷発行
昭和三十四年三月十五日第三刷発行

著者　井上靖
発行者　野間省一
印刷者　堀鉄判
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町三ノ一九
電話大塚(94)三一〇一―三一〇九
振替東京三九三〇番

定価二八〇円

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

(文弘社印刷・大進堂製本)

© YASUSHI INOUE 1958

揺れる耳飾り

装幀・森田元子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

耿子が青い小型のスーツ・ケースを持って、自由ヶ丘の家の玄関の土間へ降り立った時は、午刻を少し廻っていた。

「じゃ、お願いします。二日ほど」

玄関まで送って出てくれた義母の方へ耿子は言った。

「たまだから、二日と言わず三日でも四日でも行っておいで」

義母の松江は今年になってからまた肥り出した十七貫何百匁かの体軀を、女中が運んで来た籐の小さい腰掛けの上に載せて、耿子が身を屈めて白い靴を履くのを見降ろすようにして見ていた。片時でも立っているのが大儀なので、玄関へ出る時でも、台所へ出る時でも、松江は自分の行くところへはいつも腰掛けを同行させる。

「でも、そうゆっくりしていられませんわ、お店の方が——。それでなくても、人手が足りなくて大変なんですもの」

「じゃ、まあ、適当に帰っていらっしゃい。村の人たちにも、よろしく言って下さいよ。五平

にも、惣造にも、おしげにも」
「承知いたしました」
五平というのは、これから耿子が行こうとしている伊豆の西海岸のK村の漁師で、もう十何年も、別荘を管理して貰っている老人である。惣造はそこの長男で、おしげは、惣造の細君である。松江はK村で自分の知っている人たちを呼び棄てにした昔の習慣を、時代のすっかり変った戦後の今日まで改めないで持っていた。
耿子が玄関を出ようとすると、
「それから、帰る時、ひものを忘れないでお土産に持って来て下さいよ」
松江は言った。ひものことは、朝から三回目である。
「大丈夫、忘れませんわよ」
耿子は言いながらうんざりした。松江は今年六十歳だが、この春あたりから物忘れが烈しくなり、食べ物のこととなると、いくらか子供っぽくなっている。
「それからね」
玄関を出たところで、耿子はまた呼びとめられた。
「入れ替りに、靡沙子をすぐ帰して下さい」
靡沙子は去年私立の大学を出た末娘で、もう二十日間程、一人でK村の別荘で過している。
「でも、わたし二晩だけですから、一緒に帰ってはいけません？」

「そりゃ、それでもいいけど、わたしは一人なんですからね」
それ、始まった！　と耿子は思った。珍しく機嫌よく出させてくれると思ったが、最後になって、そろそろ厭味が飛び出し始めた恰好であった。
「じゃ、わたしの替りに、お母さまがいらっしゃることにすればよかった」
耿子も多少むっとして言った。
「わたしは厭ですよ。あんな魚臭いところなんぞ。――それに、もう泳げはしません」
「そりゃ、泳げませんわ。六十になって泳いだら新聞に出ます」
すると、松江は籐椅子から立ち上がると、ちょっと悲しそうな顔をして、
「気をつけて行ってらっしゃい」
と言うと、ゆっくりと肥満した躰を奥へ運んで行った。
耿子は、郊外電車の駅の方へ、両側に大きい住宅許りが立ち並んでいる静かな道を歩いて行った。女中のさくが追いかけて来て、鞄を持ってくれた。
「電車でいらっしゃいます？」
「ううん。――急ぐから自動車にしましょう。お店へもちょっと顔を出さないと――」
「でしたら、自動車を呼びましたのに」
「だめ、だめ」
そう言って、耿子は笑ってみせた。海へ遊びに行くのに、ハイヤーを家へ招んだりしては、

義母の松江がうるさいという意味であった。

駅前のタクシー会社で、耿子は中型の新車を選んでそれに乗った。

「有楽町へ行って、そこでちょっと待っていて貰いますわ。それから東京駅へ行って下さい」

自動車が走り出すと、さすがにこれで二日ほど家から逃れ出せるといった吻とした思いがあった。八月も終りに近いが、暑さはこの頃になって却ってきびしくなっている。

有楽町の駅の近くのMNビルの前でくるまを降りると、鞄は車内へおいて、身一つで、耿子はビルの正面の入口からはいった。そして横手の階段を地下へ降りると、広い喫茶室とは反対側の、楽器店、化粧品店、カメラ店、洋品店などの店舗が並んでいる一角へとはいって行った。

三浦運動具店——ここが耿子の店である。店は間口は狭いが、奥に深く、ゴルフ道具や登山道具がぎっちりと、その長方形の明るい箱の中に詰め込まれてある。いつものことだが、客は十人ほど居て、三人の女店員と、二人の男店員がそれぞれ忙しそうに客を応対していた。耿子は店へはいると、直ぐ奥の事務所の扉を開けた。ワイシャツ姿の石野伸彦が机に対って、帳簿を整理していた。

「今日、構いません？」

「どうぞ」

振り向いて、石野は言った。

「二泊して来ます」
「二泊でも、三泊でもいいですよ。たまにはのんびりしたらいいでしょう」
「お母さんも、そう言いましたわ」
「珍らしいですな」
「でも、すぐそのあとがうるさくなりそうでしたから、大急ぎで逃げて来ましたの」
「逃けることはないですよ。大威張りで出てくればいい」
「そうも参りませんわ。――でも、わたし一人抜け出してお気の毒みたい」
「僕たちにですか」
「ええ」
「気の弱い社長さんだな」
「社長じゃありません」
「店主ですか」
それから石野は煙草に火を点けると、椅子から立ち上がって、
「まあ、心配しないで行ってらっしゃい。僕も明後日の日曜は釣りに行きますよ」
「どちらへ？」
「まだ決まってません」
「じゃ、伊豆へいらっしゃいません？　わたくし、一日ぐらい帰るのを延ばしてもいいです

わ。義妹も居りますのよ」
「だめですよ。昼間はゴルフをやり、夜は釣りをやろうという慾の深い作戦ですから」
「どこですの、両方できるところ」
「さあ」
石野は笑って、それには答えなかった。耿子はこの時、ふと石野の笑いの中に老いに似たものを感じた。
石野伸彦は、一昨年物故した夫の龍助と大学が同期であるから、四十歳を一つか、二つ越したぐらいの年配である。いまが男盛りの絶頂である筈であり、事実、ゴルフでも山登りでも釣りでも、一応書物の一冊や二冊ぐらい出すぐらいにはやってのけ、がっちりした分厚い胸と、陽灼けした引き緊まった肌とを持っている。石野のどこにも老いの寄りつく筈はないわけだったが、しかし、耿子は、この時ばかりでなく、最近彼の不用意に見せる笑いや横顔の中によく老いといっていいような静かな疲れを見出すことがあった。

耿子は二時の湘南電車に乗った。混んでいると思ったが、二等車の内部はがら空きだった。
東京の土地を離れるのは殆ど一年振りである。夫の龍助が突然盲腸炎で他界してから、丁度この八月で二年になる。子供もあるわけではなし、世の習慣に従えば、婚家先に必ずしも留ま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

っていなければならないわけでもなかったが、耿子の場合、それが出来にくかった。
夫の母の松江も年老いていたし、妹の靡沙子もまだ結婚前ではあり、夫が亡くなったからと言って、おいそれと義母と義妹とを残して出て行かれるものではなかった。それに生活のこともあった。商売は龍助の父の代からの運動具店で、個人の商店としては東京ばかりでなく、全国的にも名を知られていたが、併し、戦争という特殊な時代を経ていたので、やはり商売をやらないで一家の者が生きて行けるだけの蓄財はなかった。あとに残された三人の女が食べて行くには、やはり今まで通り店を続けて行くほかはなかった。
龍助に亡くなられた時は、耿子もこれから先の生活が思いやられて、一時は呆然としたが、夫の友達たちに勧められて、耿子は自分でその店をやって行く決心をしたのであった。それに夫の学生時代からの親友で、満鉄の社員として相当のところまで行った石野伸彦が、龍助の物故する少し前に引揚げて来て、たまたま職をさがしているときだったので、耿子は石野に店を手伝って貰うことにしたのである。いくら頑張っても、女手一つでは経営できる店ではなかった。
初め、石野にその話を持って行った時、石野がたとえ店の采配を揮うにしても、結局は他人の店の手伝いにしか過ぎない仕事を引受けてくれるかどうか危ぶまれたが、耿子の予想に反して、石野は案外簡単に話に乗って来た。
あとで、店で一緒に仕事をするようになってから、耿子は石野という人物の人となりを知っ

たのであるが、石野はどこかにもう自分の人生を投げ出しているようなところがあった。一旗揚げるとか、もう一度世の中に自分を押し出して行くとかいった気持は少しも持っていなかった。のんきに片方で釣りでもしていられるなら、商売は何んでも結構だと考えている風なところがあった。と言って、仕事は投げやりでも、無気力でもなかった。もともと学生時代から運動は何でも好きな方で、そんなことから運動用品の取扱いも厭ではないらしく、龍助の時代より、店はむしろ売上げを増しているくらいだった。

耿子も、仕事の大部分は石野に任せていたが、しかし、やはり店主といった恰好で毎日のように店へは姿を見せていた。九時の開店時刻から五時の閉店時刻までは、使っている五人の男女店員と同様に、地下の一室で過した。店へ出ていれば、仕事は幾らでもあった。殆ど一日中立ち詰めで、客の相手をして過すこともあった。

耿子は、夫が亡くなってから、この二年間に、自分の将来というものをあれこれ考えたが、現在は、一応気持は決まっていた。義妹を嫁がせるのも自分の仕事であれば、義母を養うのも自分の仕事であってみれば、いくらじたばたしてみたところで、いまの境遇から脱け出せる筈のものではなかった。三浦龍助のもとに嫁いだ時、すでに自分という女の一生は決まってしまったのだと、この頃耿子は思うようになっている。

耿子が嫁ぐ前に、松江の夫であり、龍助や靡沙子の父であり、また耿子にとっては義父に当る辰一郎は亡くなっていた。併し、この義父の時代は、三浦家の全盛時代で、軽井沢にも広大

な土地を持ったり、伊豆や箱根にも別荘を持ったりした。その頃は百貨店に現在のような大組織の運動用品部が出来ない時代で、「ミウラ」というマークのはいった運動用品が全国にばら撒かれ、いわば利益を「ミウラ」という店名で独占していた形であった。そうした時代を知っているだけに、耿子にとっては、義母の松江の取扱いは難しかった。悪い人でも、意地悪い人間でもなかったが、わが儘で、贅沢で、気難しかった。

現在は、嫁の耿子の細腕で一家の生活が支えられていることは、松江も充分知っていたが、しかし永年身にしみついたわが儘は直らなかった。耿子は店に出ていると体は疲れたが、気疲れは松江と一緒に家に居る時の方が甚しかった。そうした家庭からも、店からも脱け出して、たとえ二三日の短い間とは言え、海岸の空気を吸いに行くのは、耿子にとってはやはり有難いことであった。

伊豆のK村の別荘は、義父の時代からのもので、夏以外の期間は戸締りをして五平という漁師にその管理を頼んであった。夏も、去年、一昨年はだれも行かず、今年はあまり勿体ないというので義妹の摩沙子が学校時代の友達を連れて行っていたが、耿子はこの別荘を今年限りで手離そうと思っていた。余り役に立たない別荘ではあり、その管理とか修理とかに無駄な金が要った。このことは松江にはまだ話をしてなかったが、耿子はそんな風に考えていた。

そんなこともあって、耿子は一度伊豆のK村の別荘を夏の間に訪ねたいと思っていたが、それが八月ももう直ぐ終りになる今頃になって、漸く実現したのであった。

沼津で湘南電車を降りると、耿子は駅前からタクシーに乗った。沼津から静浦に出て、道は屈曲の多い海岸線に沿って走っている。部落を抜ける度に、松江が嫌いだと言った魚臭い匂いが潮風に乗って吹きつけて来た。

K村は沼津からタクシーで三十分ほどのところにある。部落の真ん中頃で、耿子はくるまを降りると、海とは反対側の丘陵の斜面についている細い道を上って行った。遅咲きの百日紅が、別荘の庭の垣根から道の上に薄紅い花をつけた枝を伸ばしている。この花を見ると、耿子はいつも亡き龍助のことを思い出す。結婚した年、ここへ来てひと夏を過したが、まだ戦争の傷が癒えない頃で、漁村に居ても、魚は充分には手にはいらなかった。空のザルを持って、朝晩、この紅い花の下をくぐって、坂を上ったり降りたりしたものであった。

耿子は裏木戸からはいって行った。庭は夏草が生い繁って荒れていた。庭を突切って、建物へ近寄って行くと、縁側で籐椅子に痩せぎすの長身を横たえている靡沙子の姿が見えた。耿子が声を掛けようとする前に、靡沙子は躰を起して、いかにも驚いたように耿子の方を見詰めていたが、その驚きがやがて靡沙子らしい大袈裟な悦びに変った。

「ああら、お姉さま。ひどいわ、突然いらっしゃるんですもの」

その声と一緒に、籐椅子から離れると、

「よく来れましたわねえ。母さん、文句言ったでしょう」
「いいえ」
「まあ、不思議！　自分は来たくないくせに、人に来られるのは腹が立つんですもの」
「だって、靡沙ちゃん、来てるじゃありませんか」
「わたしは自分の子供ですもの、仕方がないわ。お姉さまはお嫁さん」
そんな靡沙子の言葉を遮って、
「変ったことありませんでしょうね」
「何もありません」
「お友達は？」
「二三日前、帰りましたの」
「じゃあ、靡沙ちゃん、一人！」
「ええ」
「夜、ここへ一人で寝てるの？」
「五平爺さんとこの娘さんが二人で泊りに来てくれてます。――心配性ね」
「心配性じゃないけど、娘さん一人じゃいけないわ」
「何がいけないの？」
「ばかねえ」

耿子は、何を話しても、この妹には適わないと思った。何もかも承知していてとぼけているところがあった。

部屋は六畳間と八畳間が並び、奥には台所と浴室のほかに、六畳の茶の間がついている。二階も二部屋あるが、この方は戸締りされてあった。

六畳の座敷に坐って、そろそろ夕闇が迫ろうとしている夏草の生い茂った庭を見ていると、そこへ五平爺さんの嫁であるおしげさんが顔を出した。四十歳ぐらいである。

「いま、奥さんが坂を上って来られるのを見ていましたよ。ようこそ、まあ——」

自分の家の客でも迎えるようなことを言って、それから折角別荘を持っていて、一年に一度くらい来て貰わないと、管理している方が張合がないというようなことを、挨拶かわりに、にこにこした顔で言った。

耿子は暮れてしまわないうちに、せいいっぱい浜辺の空気を吸いたかったので、靡沙子と一緒に浜へ出ることにした。その間に、別荘の裏手にあるおしげさんの家で夕食の支度を整えておいて貰うことにした。

再びいま上って来た坂を降りて、いったん道路に出て、浜の方へ降りて行くと、夕方の小波一つない静かな海が拡がっていた。浜辺には四五人の子供のほかに人影は見えなかった。〝ただ壮大なものが静かに傾いているのであった〟というこの季節の海辺を歌った夭折した詩人の詩の一句が、耿子には思い出されて来た。二人は並んで、波打際を小さい岬の方へ歩いて行っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com